

手法調査 業務調査票 (フェーズ1終了時)

調査方法

グループ討論

参考資料

山岸 会子 隊員 隊員報告書
北方 美紀 隊員 隊員報告書
北方 美紀 隊員 カレタジ共同菜園報告書(1993~1996)

記入者

曾根 秀樹 (8-1 野菜)

記入年月日

04/11/1997

対象者調査

カレタジ共同菜園耕作者インタビュー

1998年4月

1998年4月10日に個別で行ったインタビューの結果を以下のようにまとめる。回答者は以下の10名。空白は既回答である。
Ab BEYDARA (A.B.), Djibo ALZUUMA (D.A.), Hassan SADOUM (H.S.),
Mounkara NYANDOU (M.N.), Moussa SALOUM (S.A.), Seydou AMADOU (S.U.),
Seydou un teS (S.ut.), Yakuba SALOUM (Y.S.), Youssou MOUMOUNY (Y.M.),
Monsieur un te (un te)

質問1 プロジェクトのどのような活動を評価していますか。

- A.B.
- D.A.
- H.S.
- M.N.
- M.S. フェンス立て等共同菜園設置に際して共同作業ができるようになった。プロジェクトが来てから話し合いもできるようになった。
- S.A. フェンスと井戸の設置に満足している。
- S.ut.
- Y.S.
- Y.M.
- un te 土地が貸してもらえなくなった。

質問2 また、プロジェクトのどのような活動を評価していませんか。

- A.B.
- D.A.
- H.S.
- M.N.
- M.S.
- S.A.
- S.ut.
- Y.S. 畜舎の改善で収量が低下してきたので、飼料などを教えてもらうことを良い気持ちでいるのに、プロジェクトは教えてくれない。
- Y.M.
- un te

質問3 あなた自身の栽培に際して何か問題がありましたら教えてください。

- A.B. 今もカボチャを栽培しているが、収穫が少ない。
- D.A. 例年1年目はよく育ち、今年も育ちが悪くなったのは、畑々に収量が下がってきたからだ。だからやる気がなくなってきた。地主に訴えることも、人々が耕作しなくなった原因の一つだろう。
- H.S. 少人数しか耕作しなくなったのは、何か活動に障害があるからだろう。
- M.N. 例年1年目はレタス、キャベツ、ジャガイモ、カボチャ、ニンジン、パンプカダイコンを栽培し、収穫が多かった。しかし、2年目からはバクテリアによる被害が激しくなった。今年も私は耕作したが、収穫皆無であった。
- M.S. 例年当初はレタスの収量が良かった。しかし、バクテリアの害が激しくやる気がなくなってきた。
- S.A. 井戸に水がないこと、畜舎の改善が大きいことなどの点のために人々は共同菜園で退かなくなった。
- S.ut. 例年1年目は多くの人が、レタス、キャベツなど様々な野菜を栽培し、収穫が豊かになった。しかし、2年目からはバクテリアによる被害があり、この年私の農作物の収穫は皆無であった。3年目からは耕作していない。
- Y.S. 例年1年目はレタスを多く栽培した。トマトも栽培した。しかし、腐りやすくなる気になってきた。2年目からはカボチャとレタスを栽培している。2年目から今もなおついている問題は害虫、特にバクテリアによる害である。いくら調べてもバクテリアの被害に合う。地主を信用できない。またそうでなくとも地主のことは気にしなければならぬので、自由に耕作するためにためらいがある。
- Y.M. 例年1年目はたくさんレタスとトマトを栽培した。レタスは自家消費したし、余剰分は販売した。しかしトマトは売れなかった。2年目からは害虫とバクテリアの被害に悩まされてきた。今考えている問題は野菜栽培全般と特にバクテリアの被害が大きいこと、カボチャが腐水しても腐らないことである。
- un te 種1600g、化学肥料2500g、糞1000gの費用をかけても1区画しかタマネギが殖らなかつた。しかも、移植が遅れたので遅くもならなかつた。

質問4 プロジェクトに際して、例えば、技術、やる気、物の考え方においてあなたほどのように変わったか。

- A.B.
- D.A.
- H.S. 収量が落ちてきたとき、モーターポンプで充満できると思い、それを要求してきたが、しかしモーターポンプがあっても畑々はあまり豊かにならないだろうということがわかってきた。第一、井戸の掘り下げができず井戸に水がない。
- M.N.
- M.S. 共同菜園設置の作業を手伝ったが当初はなぜ無給なのかわからなかったが、今はそれが自分自身のためだったからだとわかっている。
- S.A. 人々がいっしょに仕事をするといい。タマネギを栽培するようになった。
- S.ut. 例年1年目は、人々は隊員によって栽培の区画割や栽培方法などについて教けられたが、2年目からはあまり指導がなくても自分たちでできるようになった。
- Y.S.
- Y.M.
- un te 隊員からレタスの移植を学んだ。

質問5 または何も変わらなかったか。

- A.B. 何も変わっていない。
- D.A. 何も変わっていない。もし変わっていたら、栽培に何かの気化があったら、何も変わらなかつたら、やる気も失った。
- H.S.
- M.N. 常作業全般を通してあまり変わっていないと思う。というのは、共同菜園で伝統的な栽培をしているから。
- M.S.
- S.A.
- S.ut.
- Y.S.
- Y.M. 何も変わらなかった。てんびん式水取り装置があるが灌水方法が改善されたとはいえないし、1区画しかない。したがって生産性も向上していない。
- un te

質問6 今年プロジェクトがあった後も、あなたはカレタジ共同菜園の中で耕作し続けますか。

- A.B. 人々も耕作し続けたいと思うし、私も耕作する。
- D.A. 畑はたぶん栽培し続けたい。しかし、このまま収量が減えなかつたら、プロジェクトがいなくても栽培は止める。
- H.S. 人々は豊かにならざるを得ない。なぜなら、私のグループも働いておらず、地主を信用もせず、収量も悪いため。
- M.N. プロジェクトがなくても人々は耕作しつづけるだろう。
- M.S. 私は、井戸に使うセメントの袋を売って金と石炭を共同菜園設置のために買おうとした。しかし無効で、だから、これからは共同菜園で耕作しつづける。代わりに肥料が豊かになっていない人は耕作しないだろう。
- S.A. 私は豊かでない。なぜなら、バクテリアの被害が大きい。タマネギを植えても腐水したから。私は例年2年目まで耕作したが、3年目からは止めている。
- S.ut. 私は耕作しませんが、その畑に私の土を他の畑に貸す。

手法調査 業務調査票（フェーズ1終了時）

Y.S. プロジェクトが去ったら、人々は栽培しなくなると思う。なぜなら、害虫防除を教えず収量が低下して、やる気を失ってきたからだ。それに地主にも信用がない。

Y.M. プロジェクトが去ったら、みんな栽培しなくなると思う。
untel プロジェクトが去っても、人々は耕作し続けるだろうと思う。

質問7 プロジェクトが去る、去らないにかかわらず、あなたはカレタジ共同農園で何をしたいですか。

- A.B. カボチャ栽培
- D.A. H.S.
- M.N. カボチャ栽培、今年は収穫量減であったので。
- M.S. パッタの改善を食い止めることが一番の問題である。その問題を解決したら、てんびん式井戸後み装置を使うことを積極的に考えたい。
- S.A. S.ut. カボチャ、ジャガイモ、レタス、キャベツ、トウモロコシを栽培したい。
- Y.S. 農業栽培を共同農園内で行うことが夢である。拒否されたが、試遊2年目に地主に要望したことがある。
- Y.M. プロジェクトが残るなら、キャッサバを栽培したい。なぜなら、害虫に強く、灌漑せずにつつまら。
- untel レタス、カボチャ、キャベツを栽培したい。

質問8 あなたは、プロジェクトが残ることを希望しますか。

- A.B. 希望する。なぜなら、灌漑方法の改善の指導を期待しているから。
- D.A. H.S. 希望する。なぜならなくなると、みんな儲かなくなると思うから。そして、栽培技術の改良の機会もなくなるから。その機会がなくなって収量が低いままだと、地主へ野菜の現物地代を払えなくなるから。そうなる地主も不満に思うだろう。また地代は土地が地主の物であることを示す効果もある。だから土地を借りている限り、種れた野菜は地代として与えなければならない。
- M.N. 希望する。なぜなら、プロジェクトが残れば野菜栽培に関する一式と農具、モーターポンプの無償貸与を期待できるから。そしてそれが現実になれば、多くの人が再び耕作するようになるだろう。
- M.S. 希望する。なぜなら、軍で人が、病人を無料診療所に連れていってくれるから。プロジェクトが存在する意義は、野菜栽培指導というよりもそこにある。
- S.A. 希望する。
- S.ut. 希望するが、農業教育に関する一式と農具、モーターポンプの無償貸与があればプロジェクト存続の意義が高い。
- Y.S. 希望する。
- Y.M. 希望する。
- untel 希望する。

質問9 今後もプロジェクトが残るとすれば、何をあなたはプロジェクトに求めますか。

- A.B. 灌漑方法の改善
- D.A. 技術力、栽培技術の指導、害虫防除
- H.S. 栽培技術の指導
- M.N. 農業教育に関する一式と農具、モーターポンプの無償貸与
- M.S. 栽培技術の指導
- S.A. モーターポンプがほしい。
- S.ut. プロジェクトが残るならば、農業教育に関する一式と農具、モーターポンプを無償貸与してほしい。
- Y.S. 共同農園の土地を均等から買ってもらいたい。新しい技術を教えてほしい。特に害虫防除法について。
- Y.M. 井戸の水、野菜種子、農具、じょうろ、井戸からくみ出す水汲みの器がほしい。
- untel

質問10 カレタジ共同農園の将来の私(貴様)が思う適当な方針を次のように紹介するが、これに関してあなたの意見を聞かせてください。

- 定量的に区画整理と改良用水路開通をし、てんびん式井戸後み装置を使って農地する。
- 新しい技術の集積とその伝達の促進
- すべての井戸をそこに所属する耕作者自身が井戸の回り下げを行えるように、既存の6グループを再編成する。
- 使わない井戸の回りに、他村民を入植させることについての検討
- A.B. 提案はその通りだと思う。しかし、他の村民を入植させなくても自分たちで耕作し続けるから、最後の質問は不運である。
- D.A. H.S. 提案はその通りだと思う。しかし、増収と防除の技術の方が重要である。他の村民が入植するには地主の同意が必要なので、その交渉には私も関与したい。
- M.N. 提案はもっともだと思う。収量が低下している原因を解決することの方が重要ではないか。他の村の村民を入植することを前提にして不耕作地の解決を図るべきではない。
- M.S. 提案はその通りだと思う。しかし、それよりも害虫、特にゾウガの害と井戸に水がないということに對し取り急ぎほしい。
- S.A. 提案はその通りだと思う。特に、てんびん式井戸後み装置を試してみたい。
- S.ut. 新しい技術の集積よりも、水汲みが大変でパッタによる害も強いので耕作者が減ったのであるから、それを解決することの方が重要ではないか。また、不耕作地が多くなると、プロジェクトが勝手に他の村の農民を入植させるのではなく、耕作しなくなったその人々がその土地を耕作してくれる人を導くべきではないか。
- Y.S. Y.M. カレタジ村民が耕作しないのは、パッタの改善が大きいからだ。てんびん式水汲み装置の設置とグループ再編成で解決できるおは思えない。
- untel

最後に、APR-III IDRESSAが質問に答える形式ではなくて、10人の回答が結わったあとある重要な意見を述べたので記す。

- プロジェクトに求めることは、以下の2点に集約される。
- 収量がパッタ等の改善により低下してきているので、収量回復のための解決を図ること
- 土地問題について、地主と交渉すること。

1点目の発言は多くの人が答えたことと同じである。
2点目は他の人が答えていなかったことであるが、本人がどうもカレタジ村にある一般的な意見である。
もしプロジェクトが去ってしまつたら、フェンスが置かれることは確実であり、そうしたらカレタジ村民は耕作できなくなってしまうであろう。また、たとえフェンスが置かれなくても、地主はカレタジ村民に耕作させることを許さなくなるだろう。さらに不幸なことに、去る98年3月28日にカレタジ村とコンコ村の間で起こった暴動が問題を複雑にしている。地主は、コンコ村長より法廷を責めさせたビナン氏の方が村が強いのだ。具体的には、カレタジ農園の土地の賃借の契約書を、プロジェクトが仲介者となって結びたい。自分たちだけでは作成に至る見込みがない。契約書さえあれば、プロジェクトが去っても、地主がカレタジ村民に耕作を許さなくなったとき、農具で耕せるであろうから。

手法調査 業務調査票（フェーズ1終了時）

分類 野菜

活動名(仏訳) ガルミ・ガヤ視察旅行
La Tournee d'Inspection aux Regions Evoluees (Galmi et Gaya)

目的/達成目標 ガルミオニオンの本場ガルミ村と果樹の一大産地ガヤをプロジェクト地域の篤農家やグループのリーダー達に実際に視察してもらい、本場の進んだ技術に触れてもらう。

対象 その他

対象詳細 篤農家、グループのリーダー、隊員

現在の状況 1997年12月4日から8日まで初めて実施。多くの村人達に影響を与えた。今後も続けてゆく予定。

1993

1994

1995

1996

山戸寛専門家、野菜隊員3名が事前調査を行う。

1997

12月4日から8日まで、プロジェクトの初めての試みとして、視察研修旅行を企画した。
(ガルミ)

ニジェール中南部に位置し、西アフリカの多くの国で栽培されているガルミオニオンのふるさとである。ガルミ村へは近隣諸国から多くの商人達が国境を越え大型トラックでタマネギを買い付けにやってくる。国道1号線沿いの村で、首都ニアメから約540km、ビルニンコンニからは90kmである。

(ガヤ)

ニジェール最南端の国境の町である。年間降水量は800mm以上であり(プロジェクトサイトのシキエ村では、平成7年437mm)、ニアメはもとより近隣諸国へマンゴー、カンキツ類などを輸出している。

首都ニアメからは289kmである。まずドゥソまで行き南下する。ベナンへ5kmとナイジェリアへ15km、2カ国に隣接している。

(視察先協力者)

国立マラディ農業試験場 ガルミオニオン担当官 Sanni ISSA, Hadiza BOUREIMA

ガルミ村農業改良普及員 Hamni HABOU

ガルミ村タマネギ組合仲介人 Issoufou IDI

ガヤ小郡長 Moussa ECOYE

ガヤ果樹協同組合 ELHADJI Daouda HAMIDOU, 苗畑技師 Boureima LAMPO

ガヤ個人苗畑経営者 ELHADJII Daouda AMADOU

1998(予定)

対象者調査可能性

調査方法

参考資料

クロスロード1997年3月号

記入者

倉岡 哲 (7-2 野菜)

記入年月日

09/08/98

対象者調査

該当なし。

手法調査 業務調査票（フェーズ1終了時）

分類	野菜
活動名(仮訳)	ニアメ近郊先進農家見学会 La Visite des Fermes Evoluees dans la banlieue de Niamey
目的/達成目標	早出し栽培、保存など、ガルミオニオンを中心とした見学会を必要に応じて開催する。プロジェクトサイトのリーダー達に、進んだ技術に直に触れてもらい、村で試してみてもらうこと、リーダー間の情報交換、意見交換の場としても重要である。 プロジェクトサイトの農家とニアメ近郊の先進農家達との技術交換会のような見学会になることもしばしばである。
対象	グループ
対象詳細	ガルミオニオン栽培グループが中心であるが、カレタジ共同菜園のリーダー等も参加している。
現在の状況	ガルミオニオンの中でも大玉なソナルやグーデルと呼ばれるタマネギを栽培しているヨアレ。ゴティエオニオン(白玉)の産地でタマネギ栽培に詳しい農業改良普及員のいるゴティエ。ニアメ近郊でガルミオニオンの栽培がさかんなラモルデ等、隊員や現地公務員から教った情報だけでなく、村人からの見学の希望があげられることもある。まず隊員が事前に視察し、状況の確認を行い、十分な勉強してから見学会を開くことにしている。
1993	
1994	
1995	
1996	
1997	ガルミオニオン栽培のさかんなラモルデには、ガルミオニオンの種子商人もいることから隊員が個人的に情報収集を行っていた。ソトレ村のリーダーの1人の親類が当地にいることから、協力をお願いし、見学会を開催した。
1998(予定)	
対象者調査可能性	
調査方法	
参考資料	
記入者	倉岡 哲(7-2 野菜)
記入年月日	19/08/1998
対象者調査	

分類	野菜
活動名(仏訳)	<p>ヨンコト村砂丘裏農家グループの育成及び農薬散布等野菜栽培指導 La Formation du Groupe d'Agriculteurs de Yonkoto derrière la Dune et le Conseil de Culture Maraichère tel que la Pulvérisation pour Eux</p>
目的/達成目標	<p>目的① 農薬散布のグループ育成によって農薬散布を広範なものにし、カボチャ等害虫の被害に遭ってきた作物の収量の向上を図る。</p> <p>目的② 村民レベルでは高価で入手困難な農薬散布器と農薬を、当グループに所有させ、グループ外への受託散布を促進することにより、村全体の農薬散布を可能なものとする。同時にその委託者からの散布代金の徴収によって、グループ現金収入を増やさせる。</p> <p>目的③ 特に野菜栽培に関心の強い当グループに対し野菜栽培を指導し、地域のモデル農家に育成する。</p>
対象	グループ
対象詳細	<p>ウリミバエの被害を受けカボチャの収穫がほとんど皆無になることさえあったので、数か村で農薬散布グループを発足させるための村説明会を開催した経過があったが、当グループはプロジェクトが提示した条件を承諾し発足に至ったグループの1つである。メンバーは11名で、ヨンコト村、ヨンコト村で砂丘裏にある分村、ヨレイズコアラ村、ナマルデグング村の村人によって構成されている。しかし、各メンバーは圃場をヨンコト砂丘裏の持っており、各村から通ってきている。</p> <p>農薬散布者はヨンコト砂丘裏在住の Seyni MAMOUDOU であり、彼がグループ内他メンバーの圃場と、散布を委託したグループ外の村人の圃場を散布している。</p> <p>グループリーダーはヨンコト村の Idrissa KARIMOU であるが、野菜栽培と新しい技術の導入に特に熱心なのは、先の Seyni 氏とヨレイズコアラ村在住の Adamou ALI の2名である。他メンバーもおしなべて野菜栽培には熱心である。</p>
現在の状況	<p>プロジェクト予算の立て替え払いで散布器とプロテクター一式を買い与えたが、2年足らず経た現在も代金を支払い終えていない。しかし、グループ運営は正常であり、プロジェクト隊員がいなくてもしばしば自主的に会合を開いている。代金の滞納以外のことで農薬散布に関する活動は問題ないと言え、活動に落ち着きが見られる。</p> <p>新たな展開としては野菜栽培技術に関心を寄せており、その場にいるプロジェクト隊員に助言を求め、相互に圃場を訪問し合うなどの活動を行っている。</p> <p>委託散布の需要は多くなってきている。</p>
1993	
1994	
1995	
1996	<p>農薬散布グループ育成の各村説明会の後、個別に詳しくプロジェクトからの条件を説明し、発足させた。その後グループに対し、農薬散布器とプロテクター一式プロジェクト予算からの立て替え払いで買い与えた。しかし、グループ運営がうまくいかないならば、代金が支払い終えない内はいつでも返却してもらうことができるとした。グループの役職、運営方法、代金の集金・支払方法については任せた。</p> <p>農薬散布に関する注意事項を説明し、散布方法のデモンストレーションを行った。その後数回に分けて代金を回収した。</p> <p>カボチャウリミバエ防除で、農薬に代わる幼果袋掛けによる新しい防除法を試みた。</p> <p>また、グループが全体的に野菜栽培に関心があったので、野菜の種子を販売した。</p>
1997	<p>一般の村人にとって散布器と農薬は高価なため入手困難であることと、グループ内散布者もグループ外で散布し現金収入を増やしたいという希望が合致していたので、グループ近隣の2ヶ村で受託説明会を開催した。</p> <p>今年もまた散布器代金の一部を回収した。</p> <p>カボチャ袋掛けの試験第2回目を実施した。</p> <p>野菜栽培について今年も助言した。視察活動としては、メンバー2名をカルミ・ガヤ視察に引率したり、ソ</p>

手法調査 業務調査票（フェーズ1終了時）

トレ村に2回連れていくなど、他村の栽培方法等について勉強する機会を与えた。
また、同一の栽培労働で栽培・出荷時期をずらすだけで現金収入が増大できるよう、ニアメの市場に行き市場価格の変動を把握した。

1998(予定)

農薬散布器、プロテクター一式代金を全額回収する。
野菜栽培の指導を強化する。

対象者調査可能性

有

調査方法

グループ討論

参考資料

北方 美紀「カボチャの病害虫対策・農薬散布グループ化について」

記入者

曾根秀樹

記入年月日

1997年12月24日

対象者調査

ヨンコト砂丘裏グループ 耕作者インタビュー

1998年5月14日にインタビューの結果を以下のようにまとめる。
回答者は Adamou YOUNSSA 1名のみであったので、グループの代表的な意見を答えるよう促した。

質問1 プロジェクトのどのような活動を評価していますか。
ガヤ・ガルミ、ヨアレ、ゴティエへ視察に連れていってもらえたことに感謝している。

質問2 また、プロジェクトのどのような活動を評価していませんか。
タマネギ種子を遅く売りに来たことを、あまり評価していない。なぜなら、もっと早く播けば収量ももっと多かったのに、と思うからだ。

質問3 あなた自身の栽培等に関して何か問題がありましたら教えてください
無回答

質問4 プロジェクトに接して、例えば、技術、やる気、物の考え方においてあなたはどのように変わりましたか。
視察に連れていってもらえて、他の地域の農民のやり方が見え、例えば種まきの方法がわかり、野菜栽培をしようという気になった。その証拠に、初めはわずかだった耕作面積が、今は増えているし、井戸の数も増えた。

質問5 または何も変わりませんでしたか。
無回答

質問6 来年プロジェクトが去った後も、あなたはヨンコト砂丘裏グループの活動を続けますか。
プロジェクトが去った後も、グループ活動は継続したい。グループの必要性を感じたから。

質問7 プロジェクトが去る、去らないにかかわらず、あなたはグループとして何をしたいですか。
ちょうど野菜栽培時期に視察をしていたから、我々の野菜栽培の取りかきも遅くなった。今度は、したいと思うときに野菜栽培を開始したい。

質問8 あなたは、プロジェクトが残ることを希望しますか。
プロジェクトにはいてもらいたい。

質問9 今後もプロジェクトが残るとすれば、何をあなたはプロジェクトに求めますか。
視察先にはすべて、農具や機械が充実していたので、それらの器具があれば 成功することだろ

手法調査 業務調査票（フェーズ1終了時）

うと思う。だから我々も農具の援助をプロジェクトに望む。

質問10 ヨンコト砂丘農グループの将来の私(曾根)が思う適当な方針を次のように紹介するが、これに関してあなたの感想を聞かせてください。

曾根の提案はすべてにおいてもつともである。

特に、グループ員間で昨年は野菜の種をまく時期が異なっていたので、今年は一斉に収穫できるようにグループの取り組みとして一斉に種をまきたい。
来年多くタマネギを収穫できたら、視察先のガルミヤゴティエにあったタマネギ保存庫を改良したものを設置し、そこに保存したい。

分類	野菜
活動名(仏訳)	用水路脇婦人菜園における野菜栽培の展開 Developpement de la Culture Maraichere des Femmes a Cole du Canal d'Irrigation
目的/達成目標	用水路脇に耕作している女性達の現金収入増大のため、野菜の栽培技術を向上する。
対象	村
対象詳細	<p>バングコアレ村、ナマルデグング村、ヨレイズコアラ村、ヨンコト村、ギラワ村、シキエ村、ダベイの女性達が、水田用水路に流れる水をホースで引いて用水路脇の自身の畑を灌漑し、トウガラシを主力としてタマネギ、カボチャ、オクラなどを栽培している。</p> <p>各村で女性代表者等役割が組織されている。</p> <p>プロジェクトの仕事としては主にガルミオニオンの栽培を指導しているが、既に彼女らはカナダ等の援助によりガルミオニオン栽培の経験がある。</p> <p>ヨンコト村にはタマネギの苗を販売する農家があり、そして私に知る限りヨンコト村とシキエ村には高度な採種栽培技術を持っている女性が数人ずつおり、収穫量に関してはヨレイズコアラ村のある女性が最も多く穫っている。</p> <p>生産物のほとんどは自家消費となっている。</p>
現在の状況	<p>主にガルミオニオンの栽培を指導しているが、種の質が悪いことと合わせ、土質が重粘質なために根の伸長と灌水の浸透が妨げられ、病気の発生を助長し、着実な採苗ができていない。また、シロアリ、センチュウ、バッタの害も見られ、タマネギ栽培上様々な問題を抱えている。また種の価格・質及び採苗数の点で、村で採種された在来種の方がガルミオニオンよりも勝っている。</p> <p>イネの収穫までは用水路に水が流れ、その時期に適期であるトウガラシ等作物が余すことなく耕作されている。しかし、タマネギ栽培の時期は一時しか稲作と重ならないので耕作されない土地がある。</p>
1993	
1994	<p>アンケート活動をした。そして、その回答で特にギラワ村の女性から野菜栽培の指導への要望を受け、それに対する調査活動を開始した。</p> <p>菜園巡回も行った。</p>
1995	<p>ギラワ村、シキエ村で用水路脇婦人菜園に関する問題点等について話し合った。</p> <p>ギラワ村、シキエ村、ダベイ、ヨンコト・ソルカイドで、ガルミオニオンの種子を販売した。</p> <p>種子販売後、育苗がうまくいかなかった村があったが、ギラワ村においてはその原因について話し合い、播種デモンストレーションを行った。その後個別に播種巡回指導をした。</p> <p>ギラワ村、シキエ村でタマネギの育苗調査、シキエで本圃での栽培及び収穫調査を行った。</p> <p>村全体で苗が多くできなかったため、プロジェクト事務所畑で苗を作り、ギラワ村、シキエ村の農民(女性)へその苗を供与した。</p> <p>ダベイ、ヨンコト・ソルカイドでは、収穫後反省と今後のタマネギ栽培ことについて話し合った。</p> <p>ヨンコト村のハイサさんへガルミオニオン種子を販売し、彼女の栽培と苗販売について調査した。</p>
1996	<p>シキエ村2ヶ所、ギラワ村1ヶ所で、講師にヨンコト村のハイサさんを迎えガルミオニオンの播種デモンストレーションを開催した。その時種子を販売し、多くの農家(女性)がデモ地の周りに各自苗床を作り、播種をした。その後育苗指導の巡回を行った。</p> <p>その他の村へも種子を販売した。</p> <p>ヨンコト村のハイサさんへは、多めに種を売り、個別にデモ地の育苗がうまくできなかった場合のため、またはその他の人へ売って稼げるように、販売用の苗をつくってもらった。また、その感想、販売額等の調査も行った。</p> <p>共同育苗場で育苗した農家に対し、採れた苗の量、共同育苗をしてよかったかどうか、本圃における栽培及び収量、その販売の追跡調査を行った。</p> <p>時折、トウガラシの栽培指導も行った。</p>
1997	<p>ヨレイズコアラ村、ナマルデグング村、シキエ村で、ガルミオニオンの播種デモンストレーションと種子の販売を行った。その後育苗の巡回指導を行った。</p> <p>ヨレイズコアラ村では苗立ち数が種子の性質が悪かったせいも少なかった。その土質が重粘土質のせ</p>

手法調査 業務調査票（フェーズ1終了時）

いも考えられるので、デモンストレーションと同じ箇所に砂を混入して再播種をし、従来の土質と苗立ち数を比較する実験を行った。サイ方面へ育苗の見学のため、代表者2名連れていった、また実験地の苗が良くできてもお足りないため、苗を買う機会を与えた。

ヨンコト村、ヨンコト・ソルカイド、カレタジ、バングコアレ村へは種子販売のみを行った。

1998(予定)

ガルミオニオン栽培普及のため、種子を販売するが、国立コロ農業試験場のは回さない。
タマネギ苗立ち数増加に向け、重粘土壌には砂を混入する実験を行う。
用水路脇婦人菜園におけるトウガラシなど他作物に関して、問題点を調査する。

対象者調査可能性

無

調査方法

参考資料

北方美紀隊員「用水路脇婦人菜園でのGALMIオニオン報告書」

記入者

曾根 秀樹 (8-1 野菜)

記入年月日

22/12/1997

対象者調査

該当なし。

手法調査 業務調査票（フェーズ1終了時）

分類 野菜

活動名(仏訳) ガルミ地方調査活動
Le Recherche en Region de Galmi et Maradi

目的/達成目標 マラディ国立農業試験場の協力を得て、本場であるガルミ村を中心とする地域のガルミオニオン栽培実態調査、ことに栽培技術、保存技術、早出し栽培など隊員と現地公務員あるいは村のリーダーと週末などを利用し行っている。また、マラディ国立農業試験場で採種されたガルミオニオンの種子も購入している。今後も先進地域の技術を取り入れ、村人達と隊員で検討し、この地域にあったものに改良していくためにもガルミ地方調査活動は必要不可欠である。

対象 その他

対象詳細

現在の状況

1993

1994

1995

1996

ガルミ地方調査

第1回調査 1996年11月12日～14日

訪問先;ガルミ、マディア

内容;ガルミオニオン栽培実態調査

第2回調査 1996年12月26日～29日

訪問先;マラディ、ガルミ、マディア、マラディ国立農業試験場

内容;保存技術の見学

1997

第3回調査 1997年6月14日～18日

訪問先;ガルミ、マラディ、ガルミ村近郊の村

内容;保存技術の見学、近隣諸国タマネギ商人へのインタビュー

第4回調査 1997年7月25日～27日

訪問先;ガルミ、マラディ、スマラナ

内容;早出し用ガルミオニオンの苗床の見学、ガルミオニオン種子の購入

第5回調査 1997年11月1日～3日

訪問先;ガルミ、マラディ、スマラナ、マラディ国立農業試験場

内容;ガルミオニオン実験農場の見学、ガルミオニオン苗床の見学

1998(予定)

第6回調査 1998年4月25日～27日

訪問先;マラディ国立農業試験場

内容;ニジュールのタマネギの品種

第7回調査 1998年5月30日～6月1日

訪問先;クウア、ケイタ、マラディ国立農業試験場

内容;村人の採種栽培技術研修について、ガルミオニオン種子の購入

第8回調査

訪問先;ガルミ、マラディ国立農業試験場

内容;ガルミ村、アワレ村のタマネギ出荷について、保存状況調査

マラディ国立農業試験場見学、ガルミオニオン種子の購入

手法調査 業務調査票（フェーズ1終了時）

対象者調査可能性

調査方法

参考資料

記入者

倉岡 哲 (7-2 野菜)

記入年月日

19/08/1998

対象者調査

手法調査 業務調査票（フェーズ1終了時）

分類	野菜
活動名(仏訳)	小学校APP支援活動(菜園巡回) (コンバ方面) La Rond du Jardin Scolaire (Direction Komba)
目的/達成目標	小学校の子供達に野菜栽培に関する知識を学んでもらい、経験を積んでもらう。とくにこのニアメに近い小学校ではガルミオニオンの指導も要請されていたため、村人の協力を得て隊員が前に出て行くよりもむしろ村の篤農家と小学校のパイプ役になることを目指している。プロジェクト終了後も村人が小学校に協力してくれる内容にしていきたい。
対象	その他
対象詳細	プロジェクト対象校5校 コンバ小学校、ドライナ小学校、サガフォンド小学校、サランドベネ小学校、サランドガンダ小学校
現在の状況	1997年10月より要請を受けて開始。カレゴロ小学校からも要請があったが、菜園が確保できず活動を断念、以下詳細を記す。
1993	
1994	
1995	
1996	
1997	<p>ドライナ、サガフォンド、サランドガンダ小学校は菜園準備がうまくいき、ガルミオニオン、サラダ菜、ナス、キャベツなどの栽培を行った。1年目ということもあり、収穫にいたらないものも多かったが、村人達をまき込んでの活動ができた。小学校は種子代を支払うことも難しい場合があり、上記3校では、採種栽培(ガルミオニオン)のデモンストレーションを行った。</p> <p>コンバ小学校は、菜園を確保したものの水の確保がうまくいかず菜園準備を行い、活動をやめてしまった。来期は水の確保が問題である。</p> <p>サランドベネ小学校は、家畜の菜園への進入が多いことから、活動を断念した。</p>
1998(予定)	<p>菜園の準備と水の確保ができない学校に対しては、ビデオ上映や紙芝居などを用いた活動も考えている。また、村人達をまき込んで、将来的にも小学校の菜園指導は村人によって行われることを期待している。</p>
対象者調査可能性	有
調査方法	小学校校長会議
参考資料	
記入者	倉岡 哲 (7-2 野菜)
記入年月日	17/08/1998
対象者調査	

手法調査 業務調査票（フェーズ1終了時）

分類	野菜
活動名(仏訳)	小学校APP支援活動(菜園巡回) (バラティ方面) La Rond du Jardin Scolaire (Direction Balati)
目的/達成目標	小学校の子供たちに、野菜栽培に関する知識及び経験を積んでもらい、将来の生活に役立ててもらおうというもの。また、野菜栽培上、付随してくる農薬散布の危険性なども合わせて学習してもらい、彼らがある程度の野菜栽培に関する知識や経験を得られればそれでよい。本格的な技術の習得を目指しているわけではない。
対象	グループ
対象詳細	プロジェクト対象校4校 バラティ、ダラ、ホンデイ、チェチェジ
現在の状況	1996年の野菜栽培のシーズンより開始。(1996年10月～1997年3月頃) (※1994年から野菜隊員が個人的に巡回は行っていた。) 1996年11月からバラティ、ダラ小学校の巡回が始まる。週に1度は菜園を巡回し、何か問題があれば随時指示してゆく。また必要があれば、播種デモンストレーションなど、菜園においての実技指導を行う。 1997年10月から、ホンデイ、バラティ、チェチェジ小学校を巡回する。昨年と同様の活動。
1993	
1994	
1995	
1996	今期の要請は、3校バラティ、ダラ、ホンデイ小学校からあったが、ホンデイ小学校ではグリアージュの問題により菜園活動を見送る。 ダラ、バラティ小学校において、12月上旬の播種デモンストレーションより、菜園活動が始まる。ダラ小学校においては、ニンジン、サラダ菜が収穫できた。バラティ小学校ではサラダ菜が収穫、当校はメロン、ジャガイモ、ナス、トマトなどもわずかながら栽培をしていたが、いずれも害虫、および病害により、収穫にいたらなかった。
1997	今期の要請は4校バラティ、ダラ、ホンデイ、チェチェジ小学校からあった。このうちダラ小学校は井戸が今年から使えなくなり、菜園活動を断念。 バラティ、ホンデイ、チェチェジ小学校において10月より活動を開始する。また、週1回の巡回及びアドバイスがその活動内容である。
1998(予定)	今後も、小学校の先生を中心とした野菜の栽培技術の指導が求められる。子供たちにはまず、野菜栽培を経験させるということがあり、確かに理論も大事ではあるが、理解できるかどうかはわからない。
対象者調査可能性	有
調査方法	キーパーソンとのインタビュー 各小学校の先生に聞き取り調査を行う。しかし、教員の人事異動により、本人にあえなくなる可能性がある。
参考資料	杉森 尚隊員 隊員報告書
記入者	杉森 尚(8-1 野菜)
記入年月日	23/12/1997
対象者調査	該当なし。

手法調査 業務調査票（フェーズ1終了時）

分類	野菜
活動名(仏訳)	野菜栽培アンケート L'Enquete sur les Activites Cultures Maraicheres
目的/達成目標	プロジェクトサイト内22ヶ村において菜園を巡回し、アンケートを行ったもので、これからの活動における、何かの指標となれば良いというもの。
対象	個人
対象詳細	22ヶ村で野菜栽培に関する啓蒙活動を行い、そのとき来ていた村人の名前リストを作り、リストをもとに村人に対するアンケート用紙をもって菜園を訪れ、今後の活動の役に立てる意図をもって実施された。1993年～1995年にかけてアンケートは行われ、およそ160名を対象にしている。
現在の状況	1997年、野菜隊員がバラティ村、ホンデイカレタジ村、ダラ村、チェチェジ村において新しいアンケート用紙を作成し、菜園巡回アンケートを行っている。しかし、これは少人数しか相手にしていないので、今後の活動の参考になるかどうかはわからない。
1993	各22の村、菜園巡回アンケート調査。
1994	1993年に引き続き実施。
1995	詳しくは資料参照(質問内容等)。
1996	隊員によるアンケート対象地域の巡回指導。
1997	野菜隊員が個人的に菜園巡回アンケート調査を行う。バラティ村、チェチェジ村、ホンデイカレタジ村、ダラ村の4ヶ村。20名だけのもの。
1998(予定)	時間があればバラティ村からホンドーラ村の間で続けていきたい。
対象者調査可能性	有
調査方法	キーパフォーマントとのインタビュー アンケート用紙に村名、村人名、菜園の様子などが記載されている。 よってそれぞれ訪問すればよいと思う。
参考資料	野菜栽培アンケート用紙
記入者	杉森 尚(8-1野菜)
記入年月日	12/01/1998
対象者調査	該当なし。

手法調査 業務調査票（フェーズ1終了時）

分類	野菜
活動名(仏訳)	ニジェール農業写真集 Les Photos Agriculterels du Niger
目的/達成目標	ニジェールの農業における写真集で、ニジェール、特にプロジェクトサイトにおける農業に関するいろいろな写真が収められている。これを見て参考にすることで、新隊員や隊員候補生がニジェールの農業についていち早くイメージがつかめる。
対象	個人
対象詳細	新隊員・隊員候補生など。
現在の状況	この資料が決して全てのことを網羅している訳ではない。後続の隊員に資料の充実が期待されているが、現在までのところ誰もその仕事には着手していない。
1993	
1994	9月 撮影開始。
1995	
1996	完成。
1997	
1998(予定)	
対象者調査可能性	無
調査方法	
参考資料	ニジェール農業写真集 1996
記入者	杉森 尚 (8-1 野菜)
記入年月日	26/01/1998
対象者調査	該当なし。

分類	野菜
活動名(仏訳)	雨季のミレット栽培に関する啓蒙活動 La Sensibilisation sur la Culture de la Millet en Saison de la Pluie
目的/達成目標	サヘル地域全体で広く栽培されている主食用の穀物、ミレット(トウジンビエ)について近年収量が減少傾向にあるという報告がもたらされている。その原因として、降雨量の減少が大きな問題とされているが、一方、長年の栽培による土地の疲弊が問題となっている。そこで地域農民に対して、これらの問題を警告するとともに、身近な形での改良点を指摘することを通じて、収量の向上と安定化を図ることを目的とする。
対象	村
対象詳細	ラタ村、コイリア村、ナマロ村（プロジェクト対象外の3ヶ村） ホンデイカレタジ村、ホンデイカレゼノ村、バラティ村、ダラ村、チェチェジ村、シキエ村、ヨンコト村 （プロジェクト対象村7ヶ村）
現在の状況	1995年の5月16日から5月30日にかけて、10ヶ村で行われたこの啓蒙活動は、各村においてその反応は様々であった。1998年現在、村人たちはミレット畑における土地の改善の必要性や、その方法は理解しているのではないだろうか。実際この啓蒙は1995年のみで終わっているが、植林分野の夕方啓蒙などに引き継がれるのではないだろうか。
1993	
1994	
1995	5月16日から5月30日において、10ヶ村で啓蒙活動が行われた。
1996	
1997	
1998(予定)	
対象者調査可能性	有
調査方法	キーパフォーマントとのインタビュー 農業改良普及員のアマドゥー氏と各ヶ村を巡る。
参考資料	原田慎也 隊員「ミレット栽培に関する啓蒙活動について」
記入者	杉森 尚 (8-1 野菜)
記入年月日	12/01/1998
対象者調査	該当なし。

分類	村落開発
活動名(仏訳)	改良かまどの普及活動 La Diffusion du Foyer Amélioré
目的/達成目標	<p>女性達は薪集めから始まり、1日の多くの時間を調理に費やしている。現在使用されているかまどは熱効率が悪いだけでなく、火傷の危険、煙が目にしみるなどの短所も見られる。熱効率がよく、より安全な改良かまどの普及を促進することで女性の労働の軽減、生活の向上を図りたい。</p> <p>プロジェクトが去った後も自分たちで製作が行えるように村の中にボランティアを育て「村人から村人への普及」が実現することが望ましい。</p> <p>また改良かまどだけでなく、生活の中で問題のある部分は改善し、また、良いものがあれば自分たちの生活にとりこんでいく、という生活改善グループにまで育てることが目標である。</p>
対象	グループ
対象詳細	<p>女性グループ</p> <p>サガフオンド村・サランドガンダ村・(バングコワレ村)・ダンブー村・ヨレイズコアアラ村・(ヨンコト村)・(シキエ村)・(バラテイ村)・チェチェジ村・ナマルデグング村 計10グループ</p> <p>()の村では現在普及活動は全く行われていない。</p>
現在の状況	<p>1997年3月末までに上記10グループが結成された。その後雨季に入り活動が一時中断された。1997年8月からの追跡調査は、4グループが継続の意思がなく4グループは困難であるが継続を希望し、何も問題ないのは2グループだけであった。活動の障害となっているのはボランティアに対する「お礼」がない、依頼主が粘土を用意しない、ボランティア自身が忙しい、等であった。現在粘土の入手が困難な村もあり、活動を開始しているのはサガフオンド村・サランドガンダ村・ヨレイズコアアラ村である。サガフオンド村、サランドガンダ村では週一回定期的に会合を開き今後の活動や広く生活全般について話をしている。ヨレイズコアアラ村は唯一、お礼が成立している村なので、彼女たちを中心に情報交換・相互交流を行い、より円滑に活動が進むようにしたい。</p>
1993	
1994	
1995	<p>改良かまどの普及活動開始</p> <p>個別指導</p> <p>改良かまど希望者に対してデモンストレーションを行う。</p> <p>合計14ヶ村 要請者47名、個別指導88件</p>
1996	<p>グループに対する指導</p> <p>啓蒙活動でかまどの利点・重要性を説明し、その場でボランティアを募集する。その後、代表者宅でデモンストレーションを行い、ボランティアを3～5人のグループに分け以後3回にわたって各グループで1つずつ製作していく。</p> <p>1,2月 バラテイ村、シキエ村、ヨンコト村、ヨレイズコアアラ村</p> <p>3,4月 ナマルデグング村、バングコワレ村、ダンブー村</p> <p>夜間啓蒙活動を通じてヨレイズコアアラ村の婦人による活動を中心にビデオを作成し、22ヶ村で上映した。</p>
1997	<p>'96年同様にグループに対する指導</p> <p>チェチェジ村、サランドガンダ村、サガフオンド村</p> <p>'96年度ボランティアとの会合</p> <p>かまどを普及させる上での問題点について会合をひらいた</p> <p>コンバ村でのデモンストレーション</p> <p>夜間啓蒙後、要請がありカフェの前と村内の2回、デモンストレーションを行った。</p> <p>グループの状況調査</p>
1998(予定)	<p>1～5月 改良かまどの作成</p> <p>会合・巡回</p> <p>カレゴロ村・コンバ村・ツレ村の要請者に対するデモンストレーション</p> <p>7～8月 かまど追跡調査</p> <p>雨季の期間も月1回でも会合を定期的に行きたいと考えている。</p>

対象者調査可能性 有
 調査方法 キーパフォーマントとのインタビュー
 参考資料
 記入者 林 美奈子 (8-3 村落開発普及員)
 記入年月日 15/01/1998
 対象者調査

質問形式
 対象者に対する半構造的インタビュー（林Vとハイザ）
 質問内容

1. プロジェクトとの活動をどう感じているか。他のプロジェクトと比較してどうか。
2. どうして改良かまどを作り始めたのか。
3. 改良かまどを作り始めて、生活がどう変わったか。
4. ご主人や家の人たちはどう見ているか。
5. グループで仕事をする事についてどう感じているか。
6. 今後活動をどう続けてゆくのか。
7. 他にプロジェクトに取り組んでほしい問題はあるか。
8. 隊員が男性でも活動が出来るか。

ソレ村グループ（5人：マイムーナが答える）

1. よし。全ての活動についていい印象を持っている。
 初めて本気でつきあったプロジェクトなので、他のプロジェクトを知らないし、比較できない。
2. 始めたのは、紙芝居などで薪の消費量の削減が出来ることが分かったから。当プロジェクトが初めて教えてくれた。
 4年ほど前、ティラベリのほうから、マルヤマと呼ばれる女性が訪れて、改良かまどのデモンストレーションを行った。でも3回ほどデモをした後、彼女は去り、活動は消滅した。
3. 木材運びを、毎日午後に行っていたのが、3から4日に一度で済むようになった。
4. あまり改良かまどなどについて話をしないが、たぶん良い印象を持っているであろう。
5. 5人で何かをすることは、極当たり前のことで、1人で何かをすることも、労働量でも時間の上でも効率的である。
6. もちろん続けてゆきたい。
7. 食糧の問題は深刻である。なにか良い対策はないか。
8. 出来るが、選べるのであれば女性の方がよい。
 ? 食糧の事情について教えてほしい。

カレゴロ村グループ（ブシラ・ハマドゥ）

1. 活動についてどう思っているか。
 改良かまどの意義はよく分かっている。その活動は大切だし、良い活動だと思う。
2. 実際に使っている様子が見られないが。
 一度壊れてしまったので修理してから使おうと思っている。三石かまどと改良かまどを比較してどちらを使うか、消費される薪の金に換算して、250ICFA 対 50ICFA ともなれば考えるまでもないでしょう。
3. どうして活動が停止してしまったのか。
 村の人たちが、2つのグループに分かれて、活動がしづらい。自分自身、汚い方の地区で教えたりするのはいやである。新しいメンバーを編成直して、活動を再開したい。そのためにはプロジェクトの助けが必要である。
4. プロジェクトに対して質問や希望は、
 希望など考えつかない。プロジェクトが話を持ってきて、それについて考えるだけである。

サランドガンダ村グループ（ハド・ウモル）

1. 活動の経緯
 隊員と活動を始める（1997）。始め9人のボランティアがいたが、現在は6人に減っている。今までで台

- 計 23 個のかまどを作った。
- 活動をどう思っているか。
お礼がきちんとなされる限り、収入につながるので、活動を続けてゆきたい。改良かまどはいいものだから、出来るだけ増やしてゆきたい。
 - これから活動をどうしてゆくか。
自分自身で増やしてゆくつもりだが、プロジェクトがいっしょに活動をしたいのならそれでも良い。
 - かまど一個の製作料は、
100 から 200FCFA である。
 - プロジェクトへの要望は。
お金を貸してほしい (100,000FCFA ほど)。実際去年はミレットが不作で、今7人の子供を抱えて大変困っている。お金を借りて、米を買って市場で高く売り、その売り上げで借金を返して残りを生活費に充てたい。

チェチェジ村グループ (ハムシ・アダム、ウンム・ハスミ)

- 活動の経緯と感想
1997年に隊員が来てから活動が始まった。ボランティアは全員で12名(全員既婚)。改良かまどの活動に満足している。これからも続けたい。プロジェクトの人たちにも満足している。
- どのように生活が変化したか。
改良かまどを使うようになって、薪の消費量が減った。
- 小学校の子供達に教えた感想は。
子供達に教えることは難しくなかった。子供達が粘土を用意してくれるようになった。
- 夜間啓蒙ビデオで紹介したが、何か効果はあったか？
シキエ村でビデオを見た人が、映りが悪かったと言ったが、実際に自分の村で見たものは、映りも良かったので満足している。多くの村人が満足してくれたし、実際要請も増えた。
- これからどうして行くか。
プロジェクトが助けてくれなくても、改良かまどは普及させつつけたい。
- 他に希望は？
バラテイ村、ヨレイズコアラ村でやっていたように、編み物教室を開いてほしい。
- かまど一個あたりの制作費は？
100 ~ 250FCFA である。

ヨレイズコアラ村グループ

- 活動の経緯と感想
隊員が来てから、活動は始まった。今年で3年目になる。
- どのように生活は変化したか。
隊員が改良かまどを初めて紹介してくれた。彼女が来なかったら、改良かまどの知識は得られなかった。
- 改良かまどの利点はどこにあるのか。
 - 薪の消費量が減り、遠くの茂みまで頻繁に行かなくても良くなった。
 - 調理時間の短縮
- いま、プロジェクト隊員はあまり来なくなったが、活動に支障はないか。
実際には困らない。でも、新しいことも知りたいので、もし来てくれるのだったら、男性でも女性でも良いから定期的に来て欲しい。
- 他の村の人達にも教えていますか。
コンバ村のグループ、ヨンコト村、カレゴロ小学校、ナマロ小学校に行き行って教えてきた。
- プロジェクトに取って望むことは。
お金の貸付をして欲しい。

分類	村落開発
活動名(仏訳)	夜間啓蒙活動 Sensibilisation de la Nuit
目的/達成目標	初期の頃は、プロジェクトの紹介はもちろん、アンケート調査によりその次の年の活動計画を考案するための要請調査を行う意味合いもあった。プロジェクトと村人とのつきあいはこの業務から始まったといえる。現在では、植林・果樹分野はおもに夕方啓蒙活動を通して啓蒙・要請調査など主要業務を行い、夜間啓蒙は広い範囲の村人を対象に、プロジェクトの紹介や環境啓蒙活動を行っている。活動で用いる機材も、スライドプロジェクター、ビデオ、LCD プロジェクターへと年々充実化している。
対象	村
対象詳細	全 22ヶ村。1993 年は全ての村人を対象にしたが、結果的には女性・子供が中心に集まった。1994 年は土地を所有する成人男性を対象を絞る。しかしながら夜間では女性・子供が集まってしまう。そこで、1995 年からは夕方啓蒙活動を新たにはじめ、夜間は補足的にプロジェクトを紹介する意味で 9ヶ村のみに行う。1996 年は 22ヶ村の女性・子供を対象とし、1997 年は成人男性も観客の 3割を占める結果に至った。
現在の状況	夕方啓蒙では、成人男性を中心とする社会層に呼びかけるメッセージがもつぱらであるのは、致し方のないこととはいえ、対象を限られた枠の中にとどめてしまうことにもなる。そこで、広く女性や子供も含めた村人全体にプロジェクトの存在理由や環境問題等を考えてもらうための企画として位置づけられている。担当は村落開発普及員であるが、巡回上映はチーム全員が地区担当制を導入して行う。1996、1997 と作成段階で音楽研修振興センター (CFPM) の協力が得られたことも成功の要因として大きい。プロフェッショナルのナレーターの声で村人の反応が多く得られるのも事実である。また、1997 年からは LCD プロジェクターを使用。村人は大画面を楽しめるようになった。テーマは毎年のプロジェクトの活動を通して問題となっている話題が多い。上映時間は 30分程度が適当であることがわかってきた。
1993	10 月から 3ヶ月間住民の参加可能な時間帯の 20:00 から 22:00 頃を選び、プロジェクト地区にある 23ヶ村を回り、公演回数 48 回の啓蒙活動を実施した。この公演にのべ約 10,000 人の地域住民が参加した。当プロジェクトの活動方針・活動内容を住民に知らせることを目的とした「プロジェクト紹介」と、森林・樹木の重要性をテーマとして現在置かれている環境を認識してもらうことを目的とした「現状報告」の 2 点 (どちらもスライド映写機を使用)を中心に、「地理紹介ビデオ」、「日本紹介ビデオ」などを実施、公演 1回につき 1時間 30分程度、村の人口に応じて公演を 2から 3 回実施した。
1994	10 月 17 日から 12 月 1 日の約 1ヶ月半の間、23ヶ村 33 回の夜間スライド上映会を実施した。昨年は子供から大人までの幅広い層の農民を対象に行ったが、この年は土地を所有する成人を対象を絞った。スライドの内容も絵を見ただけで内容が判断できるような簡単なものを選び、公演場所の設定も大人が比較的容易に集まることのできるモスク(礼拝所)の横などで行うといったように前年 (1993) の反省点を生かして実施した。 内容は啓蒙スライドとプロジェクト紹介の 2 本を用意し、啓蒙スライドではこれまでに気づいた環境に関する問題点、栽培技術に関する問題を取り上げ、住民ならどのようにすれば解決できるか、簡単な改善方法を説明した。
1995	2年間の活動の結果、村や人によって意識・技術にかなりの差が出てきた。プロジェクトに対して理解の薄い村として選んだ 9ヶ村に関しては夕方の啓蒙活動前日、補足的に夜間スライド上映により、'95 年の活動報告を中心にプロジェクト紹介を行う。

1996 夕方礼拝後の時間を使い、要請者を募っていく一方で、女性や若者、子供にも環境に関する知識を持ってもらい、地域全体の意識が向上することも重要である。
 昨年の夜間のスライド上演では、改良かまど及び地域の環境破壊の写真に大きな反応が見られた。そのことは、女性の観客が多いことや村人にとって身近な写真が分かり易いことに起因している。
 そこで今年を対象を女性と子供に絞り、テーマも「改良かまど」とし、そこに環境に関する話を織り込むこととした。活動に参加している村人へのインタビューや身近な地域の映像を入れたビデオを作成した。上映時間は18分であるが、上映前に小学生用に作成した「木を植えた男」も見せた。
 全22ヶ村で11月21日より約1ヶ月間おこなった。

1997 プロジェクト5年目を迎え、その目的をよく理解し、主体的に活動に取り組む村人の姿が見られるようになった。今年はそうした村人の活動の成果が目に見える形で現れ始めた年であることを鑑み、「人々とプロジェクト」という題目で、各分野で活躍する村人を紹介する番組を作成した。全長約30分、ナレーション・音楽は音楽研修振興センターの協力を得て編集。12月上旬から対象22ヶ村・地域に上映。3,300人の動員が得られた。

1998(予定)

対象者調査可能性	有
調査方法	半構造的インタビュー
参考資料	年間報告書 1993～1997 1997年 夜間ビデオ啓蒙活動報告
記入者	関谷 雄一 (8-1 村落開発普及員)
記入年月日	21/01/1998
対象者調査	

分類	村落開発															
活動名(仏訳)	小学校 APP 支援活動 総務 Les Activités avec Les Ecoles Primaires (En Generale)															
目的/達成目標	<p>当プロジェクトサイトには合計 16 の小学校がある。小学校のカリキュラムには APP (ACTIVE PRATIQUE PRODUCTION: 生産実施活動)といわれる科目があり、この科目を通じて、プロジェクトでは 1993 年より一部の小学校において、苗木配布や菜園巡回を行ってきた。その後、他小学校からの要請も増加し、プロジェクトとしてもこの地域の将来を担う子供たちへの環境問題についての啓蒙・実践という目的もあり、1996 年より本格的に全分野を通じて、小学校 APP カリキュラムに対する支援活動を開始した。</p> <p>当プロジェクトの小学校支援活動については、学校という場の公共性を鑑みながらも、基本的に村人との活動と同様の方針に基づいて行っている。すなわち、物質的・金銭的援助を極力避け、手元にあるものを使って、良い仕事ができるように技術指導を中心にしてゆくという方針である。</p> <p>こうした方針は、援助慣れしてもらい癖がついている学校の教職員には特に、受け入れられにくい。プロジェクトチームで活動内容に工夫を凝らしながら、相手を引きつけていくことを考えている。</p> <p>この小学校 APP 支援活動の総務は、村落開発分野が担当している。</p>															
対象	その他															
対象詳細	プロジェクト対象校 16 校 カレゴロ、コンバ、グライナ、サガフオンド、サランドガンダ、サランドベネ、バングコワレ、ヨレイズコアラ、ヨンコト、シキエ、バラティ、ダラ、ホンデイカレタジ、ホンデイカレゼノ、チェチェジ、ナマロの各小学校。															
現在の状況	<p>1998 年に入り、16 校目のホンデイカレゼノ小学校とも接触が始まり、最大規模での活動の展開が予想されたが、同年 3 月に行われた校長会議においてかねてよりそれぞれの小学校で話が出ていたとおり、校長側から小学校支援活動に関して、以下の 3 つの要求が出された。すなわち、</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 校長会議の参加者に対する日当 2. 活動に必要な道具などの物質的援助 3. 井戸、囲いの設置などに必要な金銭的な援助 <p>である。これに応じて、プロジェクトチームでは再三にわたって話し合いをし、これらの要求には応じず、これまで通りの方針で支援活動を継続することを取り決め、再度校長会議を招集して理解を求めたが、同意を得ることができずに多くの小学校から活動停止を宣言され、事実上現在まで活動を継続できているのは、チェチェジ、ナマロの 2 校のみとなった。</p> <p>しかしながら、プロジェクトチームではこれを機に、小学校支援活動のあり方を見直し、各校とより深い親交を図るよう、定例会議での話し合いの徹底化、業務時間外の個別訪問の実施、学校担当制の導入など内部態勢の諸改革を行い、1998 年 10 月の新学期始業に向けて準備を開始している。</p>															
1993	バラティ小学校における植林を実施。															
1994	4 校において構内、学校の囲いに植林実施。															
1995	6 校において構内、境界への植林、野菜栽培指導、改良かまどの講義を実施。															
1996	<p>2 月より各校調査行つて、希望活動を選択してもらい、それに基づき活動を開始した。 改良かまど(1996 年 4 月)</p> <p>コンバ、サガフオンド、サランドベネ、ヨレイズコアラの 4 校で紙芝居を使った啓蒙の後デモンストレーションを行つた。</p> <p>植林前の準備啓蒙および苗木配布(1996 年 5 月～7 月)</p> <p>植林するにあたってより良い条件を作るよう準備の為の啓蒙および穴掘りデモンストレーションを行つた。苗木配布時には植林デモをした。苗木配布数および樹種は以下の通りである。</p> <table border="0"> <tr> <td>コンバ B.r. 90</td> <td>サランドガンダ A.i. 20</td> <td>サランドベネ B.r. 140</td> </tr> <tr> <td>ヨレイズコアラ P.j. 100</td> <td>バラティ P.j. 50, A.i. 8</td> <td></td> </tr> <tr> <td>ダラ A.i. 10, P.j. 10, B.r. 20, Z.m. 20</td> <td></td> <td>ホンデイカレタジ P.j. 300</td> </tr> <tr> <td>チェチェジ P.j. 230, A.i. 10</td> <td></td> <td>ナマロ P.j. 174</td> </tr> <tr> <td colspan="3">合計: 1162 本 (P.i. 864 B.r. 230 A.i. 48 Z.m. 20)</td> </tr> </table>	コンバ B.r. 90	サランドガンダ A.i. 20	サランドベネ B.r. 140	ヨレイズコアラ P.j. 100	バラティ P.j. 50, A.i. 8		ダラ A.i. 10, P.j. 10, B.r. 20, Z.m. 20		ホンデイカレタジ P.j. 300	チェチェジ P.j. 230, A.i. 10		ナマロ P.j. 174	合計: 1162 本 (P.i. 864 B.r. 230 A.i. 48 Z.m. 20)		
コンバ B.r. 90	サランドガンダ A.i. 20	サランドベネ B.r. 140														
ヨレイズコアラ P.j. 100	バラティ P.j. 50, A.i. 8															
ダラ A.i. 10, P.j. 10, B.r. 20, Z.m. 20		ホンデイカレタジ P.j. 300														
チェチェジ P.j. 230, A.i. 10		ナマロ P.j. 174														
合計: 1162 本 (P.i. 864 B.r. 230 A.i. 48 Z.m. 20)																

ビデオ上映（1996年10月）

プログラム外の企画であるが、植林分野の苗木生産前に環境に関する啓蒙ということでプロジェクトから全校に対しアニメ映画「木を植えた男」のザルマ語版を上演した。内容は、木の重要性を一人の人間の偉大な業績を通して描いたものである。

植林苗木生産（1996年11月～12月）

試験的に生産は少数とした。1週目にポット作りの説明（紙芝居）とデモンストレーション、2週目に種子処理・播種の説明（紙芝居）とデモンストレーションを行った。生産計画は以下に示す。

バラティ A.d.50 グラ A.d.50 サラドベネ B.r.25, A.d.25

1997

3月に15小学校の校長を中央苗畑に召集し、話し合いの後要請を取り、それにしたがって活動を展開した。

植林前の準備啓蒙および苗木配布（1997年5月）

苗木配布数および樹種は以下の通りである。

カレゴロ B.r.50	サラドガンダ P.j.48, B.r.96	サラドベネ B.r.198
バングコラ B.r.221	ヨレイソアラ P.j.112, B.r.112	シキエ P.j.236, A.i.60
グラ P.j.72	ホンデイカレタジ P.j.50	チェチェン P.j.30, A.i.10

合計：1,618本（P.j.548, B.r.1,000, A.i.70）

植林・果樹苗木生産活動

(1) 植林

植林苗木生産を計画していた小学校は5校あった。しかし、いずれの学校も芳しい成果をあげるにいたらなかった。計画・結果は以下の通りであった。

カレゴロ小学校は学校菜園の生け垣ができず中止した。サラドベネ小学校は、Ad, Brの生産を予定していたが、果樹生産に追われ、手つかず。バングコラ小学校では井戸が壊れ、生産できず。バラティ小学校では Ad50 を目標に生産を始めたが、34本生産するも、夏休み中に6本に減る。6本は1本150CFAで売却した。グラ小学校では、Ad50, Br50を予定していた。Adを3本生産したが、枯死。

この年は雨量が少ないことに加え、夏休み中の苗木の管理につき学校側の対応が定まらなかった点が失敗の原因と考えられる。

(2) 果樹

果樹生産技術指導の要請のあった7校を対象に1997年からAPP支援の一環として生産技術指導を開始した。実際に生産を開始するにあたっては、まず果樹生産の作業の流れと技術習得の中心となる接ぎ木のメカニズムの理解を促すため、子供達にも理解しやすい紙芝居を用いたセミナーを開くことによって作業技術を理論的に学ばせた後、実践的な活動としてマンゴー苗の生産、栽培群にそい、用土、ポット作成、播種、間引き、移植等のデモンストレーションを順次行ってきた。なお、セミナーの内容については、写真などを盛り込んだパンフレットも用意し、各校1部ずつ配布した。

しかし途中、学校が7月から9月迄の3ヶ月間夏期休暇に入ったため、その間の管理作業が停滞、日常的な灌漑水作業が学校によっては滞るところもでき、結果、苗木が水不足のため全滅するに至った学校も出た。それに対しては活動開始初年度ということもあり、また、何れともあれ一連の作業技術を子供達に習得させる目的から欠損苗については中央苗畑から最低限、技術習得に必要な分の苗木を補填し、以後の指導に充てた。

学校菜園活動（1996年10月～）

バラティ、グラの2校において菜園巡回を行った。播種、育苗、病虫害対策、収穫などの技術指導を行い、両校において、収穫されたサラダ菜、ニンジンが校長を通じて販売されるなどの実績があがっている。菜園活動は、他分野の活動とは少し異なり、現金収入に結びつくプロセスが短期間で確実であるため、これからの小学校支援活動で注目される活動である。

改良かまど（1997年4～5月）

カレゴロ、グライナ、サラドベネ、バングコラ、ヨソコト、バラティ、グラ、ホンデイカレタジ、ナマロの9校で改良かまどの利点に関する紙芝居を使った講義と、改良かまどを実際に子供たちと一緒に作る実践をおこなった。ナマロ小学校は生徒数が多く、校長の希望もあって2回実施した。

環境啓蒙劇の実施・上映（1997年5～6月、11月）

対象校に対し、環境や村の歴史を題材にしたテーマで15分程度の小劇コンクールを呼びかけたところ、コンバ、サラドベネ、バングコラ、シキエの4校が応じてくれた。5月、6月にかけてこれらを収録し、11月に各校に上映し好評を得た。また1997年夜間啓蒙ビデオの中でも紹介した。

1998(予定)

7月上旬までの活動概要

校長会議（1998年3月、5月）

今年の活動予定、支援活動の問題点などについて話し合った。

改良かまど（1998年4月～5月）

コンバ、グライナ、ヨソコト、チェチェン、ナマロの5校で改良かまどの利点に関する紙芝居を使った講義と、改良かまどを実際に子供たちと一緒に作る実践をおこなった。コンバ村、チェチェン村の婦人グループにも小学校で実践デモンストレーションを行ってもらった。

植林前の準備啓蒙および苗木配布（1998年5月～）

苗木配布数および樹種は以下の通りである。

チェチェン P.j.50, A.i.10、ナマロ A.i.31、合計：91本（P.j.50, A.i.41）

ただし、これは1998年7月現在までの途中経過であり、以後も要請に応じる可能性があることを述べておく。

果樹苗木生産活動（1998年3月～）

グライナで柑橋類の苗木、ナマロでマンゴーの苗木をそれぞれ使用した生産活動を展開してきたが、現在までに続けているのはナマロ小学校のみである。引き続き様子を見守ってゆく。

学校菜園活動（1997年10月～）

1997年10月より、野菜分野の隊員を通じて、コンバ、グライナ、サガフォンド、サラドガンダ、サラドベネ、バラティ、チェチェン、ホンデイカレタジの8校においてサラダ菜、ニンジン、トマト、ガルミオニオン等の栽培指導を行った。

対象者調査可能性 有

手法調査 業務調査票（フェーズ1終了時）

調査方法 グループ討論
参考資料 各分野、小学校 APP 支援活動業務調査票、
年間報告書
最終評価ミッション向け報告書
記入者 関谷 雄一（8-1 村落開発普及員）
記入年月日 05/08/1998
対象者調査

手法調査 業務調査票（フェーズ1終了時）

分類	村落開発
活動名(仏訳)	小学校 APP 支援活動 改良かまど講義・実践 La Diffusion du Foyer Ameliore aux Ecoles Primaires
目的/達成目標	改良かまどの利点と作り方を、紙芝居を使った講義と、実践で子供達に教える。初期の頃は、プロジェクトを手伝ってくれるキラワ村の婦人が指導員として働いてくれた。しかし、1997年の活動から、主に小学校近くの村の婦人に紙芝居や実践指導をしてもらうようになった。この活動を通じて婦人達が人に教えることを学び、村での普及活動を更に充実させる契機となることを期待している。
対象	その他
対象詳細	プロジェクト対象校 16 校 カレゴロ、コンバ、ドライナ、サガフوند、サランドガンダ、サランドベネ、バングワレ、ヨレイズコアラ、ヨ ンコト、シキエ、バラティ、ドラ、ホンデイカレタジ、ホンデイカレゼノ、チェチェジ、ナマロの各小学校。
現在の状況	業務調査票「小学校 APP 支援活動 総務」を参照。1998 年までに、対象校 16 校中 13 校に 1 ないし複数回の活動を実施している。
1993	
1994	
1995	6 校において改良かまどの講義を実施。
1996	コンバ、サガフوند、サランドベネ、ヨレイズコアラの 4 校で紙芝居を使った啓蒙のあとデモンストレーションを行った。
1997	カレゴロ、ドライナ、サランドベネ、バングワレ、ヨンコト、バラティ、ドラ、ホンデイカレタジ、ナマロの 9 校で改良かまどの利点に関する紙芝居を使った講義と、改良かまどを実際に子供たちと一緒につくる実践をおこなった。ナマロ小学校は生徒数が多く、校長の希望もあつて 2 回実施した。カレゴロ、ヨンコト、ナマロの小学校には、ヨレイズコアラ村の婦人グループが講義と実践を行った。
1998(予定)	コンバ、ドライナ、ヨンコト、チェチェジ、ナマロの 5 校で改良かまどの利点に関する紙芝居を使った講義と、改良かまどを実際に子供たちと一緒につくる実践をおこなった。コンバ村、チェチェジ村の婦人グループにも小学校で実践デモンストレーションを行ってもらった。
対象者調査可能性	無
調査方法	グループ討論
参考資料	年間報告書
記入者	関谷 雄一 (8-1 村落開発普及員)
記入年月日	05/08/98
対象者調査	

手法調査 業務調査票（フェーズ1終了時）

分類	村落開発
活動名(仏訳)	年間報告書の作成 Etablissement du Rapport Annuel
目的/達成目標	プロジェクトの年間活動概要を、一般にわかりやすく説明するための報告書。年間活動の締めくくりとしての役目も持つ。次年度の計画を立てるためにも役立つ。
対象	その他
対象詳細	植林・果樹・野菜・村落開発の4分野で手分けしてまとめ、最終的には村落開発分野がとりまとめて印刷する。
現在の状況	1997年の年間報告書はカラーコピーを導入、写真が明確に見えるものとした。引き続き1998年も写真・イラストなどを多用した分かりやすい報告書を目指したい。
1993	活動本格化1年目ということもあって、ニジュールの概要から、プロジェクトの事務所敷設計画に至るまで、おもにプロジェクトの背景の概説が中心になされている。植林・果樹分野の活動が主である。ホチキス止め、1994年1月提出。「活動計画表」記載。
1994	「果樹分野」の項目登場。改良かまど・薪炭材消費量調査活動報告も記載。活動計画表省略。プラスチック製本具使用。
1995	現地スタッフ名も記載。夜間巡業啓蒙活動から、夕方技術啓蒙活動へ。夕方啓蒙の予定(植林・果樹合同)、各分野別予定も記載。「年間タイムスケジュール」の形で「年間計画表」の記載。
1996	タイトル「年間報告書 1996」とし、「1-12」を削除。実質活動年は前年の10月から翌年の9月までであるため、それに沿うようにした。プロジェクトサイト略図の記載。12月末を締め切りとするも、1月中旬に発行、提出が遅れた。
1997	プロジェクトサイト略図は、ニジュール国地理院発行の20万分の1基本図をカラーコピーのうえ、記載。写真・イラストについてもカラーコピーを導入。15部 300,000FCFA。11月15日原稿締切。読み合わせ2回。12月22日完成。
1998(予定)	1997年と同様の手順。
対象者調査可能性	有
調査方法	半構造的インタビュー
参考資料	年間報告書 1993～1997
記入者	関谷 雄一 (8-1 村落開発普及員)
記入年月日	26/01/1998
対象者調査	

手法調査 業務調査票（フェーズ1終了時）

分類	村落開発
活動名(仏訳)	手法調査 Investigation des Methodes du Projet
目的/達成目標	当プロジェクトの各業務の詳細をデータベース化し、業務でとられている手法を明らかにする。対象者調査も行い、業務が与えた影響も評価できるようにする。 この業務はプロジェクト終了時まで継続し、当プロジェクトに関する基礎資料として残す。 またフランス語訳も行い、カウンターパートにも当手法が分かるようにし、技術移転を徹底化する。
対象	その他
対象詳細	プロジェクト全対象
現在の状況	第1フェーズ終了に向け報告書を作成、引き続きデータは収集してゆく。
1993	
1994	
1995	
1996	
1997	11月に開始。
1998(予定)	4月から各業務で調査可能なものに限り対象者調査を実施。 7月対象者調査終了。 8月に第1フェーズ終了時報告書を提出。
対象者調査可能性	無
調査方法	
参考資料	手法調査報告書(第1フェーズ終了時)
記入者	関谷 雄一 (8-1 村落開発普及員)
記入年月日	08/08/98
対象者調査	

手法調査 業務調査票（フェーズ1終了時）

分類	村落開発
活動名(仮訳)	小学校 APP 支援活動 環境啓蒙小劇 Les Petils Theatres sur Environnement
目的/達成目標	小学校の子供たちに、環境について積極的に考えてもらうために、15分程度の劇創作を提案。子供たちが、木を切ることが意味する重大性、砂漠の浸食に対する危機感を感じ取り、自らを取り巻く環境を守るにはどうすればよいか、自分たちの力で表現する機会を提供できれば目標は達成される。
対象	グループ
対象詳細	プロジェクト対象校 16 校 カレゴロ、コンバ、ダライナ、サガフォンド、サランドガンダ、サランドベネ、バングワレ、ヨレイズコアラ、ヨソコト、シキエ、バラティ、ダラ、ホンデイカレタジ、ホンデイカレゼノ、チェチェジ、ナマロの各小学校。
現在の状況	1997年5月から6月にかけて、コンバ・サランドベネ・バングワレ・シキエの4校が参加。各校8分から20分までの劇を創作、開演した。その模様は、8ミリビデオで撮影記録し、1997年11月を中心に、希望校15校に対して上演する予定。 なお、コンバ小学校、バングワレ小学校についてはすでに当該校の劇ビデオを上演済み。バングワレ小学校については生徒・村人にたいしてそれぞれ1回ずつ、合計2回上演を行った。 表彰については、11月の上演時に、教員・生徒から票をとり、もつとも票の多かったところに決める。表彰の内容については未定。
1993	
1994	
1995	
1996	
1997	「現在の状況」参照。
1998(予定)	本年度の教員を対象とした反省会(1998年3月実施予定)で希望が多かった場合、継続したい。
対象者調査可能性	有
調査方法	グループ討論 1998年3月に開催する反省会で教員と討論する。
参考資料	年間報告書 1997 関谷隊員報告書 (3号)
記入者	関谷 雄一 (8-1 村落開発普及員)
記入年月日	1997/10/26
対象者調査	

分類	村落開発
活動名(仏訳)	植樹祭 La Fête des Arbres
目的/達成目標	ニジェール国全土で行われる植樹祭にちなんで、プロジェクトと村人との交流を深めるために企画されたもの。村人にプロジェクトの存在がアピールできれば目標は達成される。
対象	個人
対象詳細	近隣ヶ村。植林配布、相撲大会の見学者に関しては、近隣ヶ村のみならず、遠くヨレイズコアラ村やバラティ村からも多くの村人がやってくる。 相撲大会のスタッフとしては、シキエ村・ギラワ村・ヨンコト村から審判・観客調整員・選手団などを選出してもらっている。1997年は特に他の村、すなわちグベイやヨレイズコアラ村、バラティ村・ホンデイカレタジ村からも相撲大会に参加したいとの希望が寄せられたが、企画の規模、管理能力なども考慮した結果、1996年と同じ形式で実施することになった。1998年はどうするか、まだ未定である。
現在の状況	シキエ・ギラワ・ヨンコトの村人にとっては、恒例の行事となりつつある。 ニジェール相撲大会については、審判を始め、選手達も要領をつかんでおり、雨天の問題を除けば支障なしに行うことができる行事である。主催者をJOCVから村人に移行できればなお理想的である。
1993	1993年は中央苗畑での苗木生産をまだ開始していなかったため、村人の反応を調べるといった意味合いのもので、少量の苗木配布とビデオによる日本紹介を行うこととなった。用意していた苗木はほとんどがアカシア・アルビダであったが、住民には人気がなく持っていかなかった。村人が希望する樹種としては、モーリング、ニーム(インドセンダン)、バオバブ、マンゴー、タマリンドがあげられる。来年の参考とした。また、日本紹介として相撲などの格闘技のビデオ上映を行ったが、特に宣伝をしたわけでもないのに、近隣の村からも見に来ており好評であった。
1994	(記録少)アカシアニロチカ 24、ポヒニア 3、アダンソニア 70、ジジフィス 20、バラニテス 1、ニーム 315、その他 245 合計 678 本の苗木を個人に配布。
1995	苗木配布: 苗畑内において苗木の無料配布を行った。昨年の人数を越える人が配布の時間前に現れ、果樹をはじめバオバブ・モーリングなど葉を食用とする樹種を中心に 80 人ほどに約 1,000 本の苗木を配布した。 ニジェール相撲大会: 村での人気スポーツにニジェール相撲があるが、近隣のシキエ・ギラワ・ヨンコト村と JOCV4 チーム、各代表 5 人にて対抗戦を行った。800 人ほどの観客が見守る中、団体戦に続いて勝ち抜いた選手による個人戦まで熱のこもった試合が繰り広げられた。なかでも村人や隊員の真剣な姿が印象的であった。 ビデオ上映: 日没後、苗畑内で映画のビデオ上映を行った。

手法調査 業務調査票（フェーズ1終了時）

1996 例年通り、中央苗畑にて苗木の配布を行った。
 植林用 (Ad.154, Pb.60, Ai.172, Ti.47, Mo.40, div.107)
 果樹 74 木(グァバ)
 ニジュール相撲大会
 昨年に引き続き、第2回ニジュール相撲大会を中央苗畑で行った。参加村・ルールは昨年同様であったが、今年は新たに少年の部を付け加えた。試合途中で予想外の雨に降られ、待機後再開することになった。試合は夜まで続き、急遽照明を設置しての大会であった。JOCV チームは健闘及ばず今年も4位であった。
 ビデオ上演
 カンフー映画を1本上映した。常に集まりやすい子供たちだけでなく、大人も楽しんだ。

1997 1997年で5回目(ニジュール相撲大会は3回目)ということもあって、企画・準備・実施に至るまで大きな混乱もみられず比較的順調に行事が進行した。
 植林苗 (Ai.50, Ec.140, Pa.2, Ks.24, Dr.14, Balanites3, Ao.21, Mo.67, Pb.67, Zi.27, Ts.49, Dn.13, Pm.30, Ca.7, 合計 508 苗)
 果樹苗マンゴー 25, レモン 25、計 50 苗
 イベントのニジュール相撲大会ではヨソコト村チームが優勝し、JOCV チームは今年も4位に終わった。夜のビデオ上映会では当日の試合模様のダイジェストを放映した。

1998(予定)

対象者調査可能性	有
調査方法	キーパフォーマントとのインタビュー
参考資料	年間報告書 植樹祭報告書 1996,1997
記入者	関谷 雄一 (8-1 村落開発普及員)
記入年月日	26/01/1998
対象者調査	

手法調査 業務調査票（フェーズ1終了時）

分類	村落開発
活動名(仮称)	村落調査 Les Recherches du Village
目的/達成目標	業務上必要に応じて村落開発普及員が中心となって行う。プロジェクトの業務遂行に必要な情報を収集するための活動である。
対象	その他
対象詳細	
現在の状況	1992 年末から 1993 年始めに行った村落調査は、プロジェクト業務開始のために必要な情報を提供した。その後 1997 年にゴルジ村調査、1998 年に周辺村落調査が行われている。
1993	1992 年末よりプロジェクトサイトの基礎的な状況を把握するために対象全ヶ村で 1993 年 1 月まで行った。
1994	
1995	
1996	
1997	ゴルジ村調査を実施。
1998(予定)	プロジェクトサイト周辺村落の簡単な調査を実施。
対象者調査可能性	無
調査方法	
参考資料	村落調査報告書 年間報告書 1997
記入者	関谷 雄一 (8-1 村落開発普及員)
記入年月日	20/08/1998
対象者調査	

手法調査 業務調査票（フェーズ1終了時）

分類	村落開発
活動名(仏訳)	水利調査 Constal de la Situation Hydraulique
目的/達成目標	プロジェクトサイト内における水利環境全般に関する調査。プロジェクト活動の一環として、水利関係について、基礎調査よりも更に深く調べ、故障したポンプの修理の可能性及び、井戸の新設を検討していく。同時に、修理費または、新設後のポンプ運営方法についても検討する。
対象	村
対象詳細	21ヶ村の村長もしくは、村の井戸の責任者。
現在の状況	この調査以降、プロジェクトサイトの水利環境に関する、プロジェクトの取り組みはない。この調査の目標は村人への啓蒙活動を通じた呼びかけを経て村人自身による井戸などの円滑な管理体制の確立であった。しかしながら、調査終了と同時に、この取り組みも終わり、その後の進展はない。 水利環境の改善に対する現場の需要はすこぶる高い。とくに、苗木生産者をはじめとする、苗畑管理者、学校菜園を希望する小学校にとっては死活問題である。第2フェーズに向けて、この問題にどう対応してゆくのか、具体的なコンセプトが必要とされている。プロジェクトが続く限り、この問題を避けて通れない。
1993	1月20日から1月29日、3月9日から3月20日の二回に分けて調査。
1994	
1995	
1996	
1997	
1998(予定)	
対象者調査可能性	有
調査方法	キーパフォーマントとのインタビュー
参考資料	酒井隊員 水利調査報告書
記入者	関谷 雄一（8-1 村落開発普及員）
記入年月日	05/08/98
対象者調査	

手法調査 業務調査票（フェーズI終了時）

分類 その他

活動名(仏訳) 週ミーティング
Réunion Hebdomadaire

重要度 大

目的/達成目標 1週間ごとのプロジェクトチームの活動の確認と活動予定に関する意見交換並びに意思決定の場である。プロジェクトチーム全員の参加が望まれる。

対象 その他

対象詳細 プロジェクト隊員

現在の状況 現在の週ミーティングで取り上げられる議事は以下の4つである。

- 1.今週の活動報告
- 2.小学校APP支援活動について
- 3.来週の活動予定並びに配車の予約
- 4.その他の事項
- 5.無線連絡事項の確認

司会は派遣隊次・名前順で全員の持ち回りとされ、1名が必ず書記を担当する。基本的に全員が参加することが要求され、大概金曜日の午後をその時間に当てる。プロジェクト隊員はこの場ですべての情報を出し合い、すべての意志決定をこの場に委ねることとされている。

1993

1994

1995

1996

1997

1998(予定)

対象者調査可能性 無

調査方法 その他

参考資料

記入者 関谷 雄一 (8-1 村落開発普及員)

記入年月日 09/08/1998

手法調査 業務調査票（フェーズ1終了時）

分類 その他

活動名(仏訳) 月例会
Reunion Mensuelle

重要度 大

目的/達成目標 月1度ニアメのJOCV/JICA事務所・専門家に活動を報告する。ここでは活動の報告、重要な連絡事項の確認などを中心に行い、プロジェクトチームの意志決定はなされない。

対象

対象詳細 ニアメJOCV/JICA事務所
プロジェクトチームリーダー
プロジェクト隊員

現在の状況

1993

1994

1995

1996

1997

1998(予定)

対象者調査可能性

調査方法

参考資料 月例会議事録

記入者 関谷 雄一 (8-1 村落開発普及員)

記入年月日 09/08/1998

手法調査 業務調査票（フェーズ1終了時）

分類 その他

活動名(仮称) 研究日
Le Jour du Stage

重要度 大

目的/達成目標 プロジェクト隊員が、業務時間を使って自らの活動の充実を図るために、プロジェクト活動に関わる事柄について自主的に学習・研究を行う。ともすれば偏りがちな知識や活動を修正し、プロジェクト全体を見渡すことができる機会を隊員自身が創り出す。

対象 その他

対象詳細 プロジェクト隊員

現在の状況 1998年月上旬からスタートした試みである。今のところ隊員の自主的な行動に任されており、報告・記録の必要性はない。

1993

1994

1995

1996

1997

1998(予定) 活動スタート。

対象者調査可能性

調査方法

参考資料

記入者 関谷 雄一 (8-1 村落開発普及員)

記入年月日 20/03/1998

JICA